

対人支援領域における現象学的研究の動向と展望 —医中誌5年分の調査から—

植田 嘉好子*¹

要 約

現象学は質的研究法の一つとして日本国内においても徐々に広まりつつあるが、研究法としての認知度や使用頻度は高くはない。この理由には、現象学がもとは哲学であり、方法的手続きが一様でないことが背景にあると考えられる。しかし患者にとって疾病や障害がどのように経験されているのかといった、人々の生きる上での意味を深く理解するためには現象学の原理が有効とされ、海外のヘルスケア研究では主要な方法論の一つと見做されている。そこで本稿は、近年国内で発表された対人支援領域の現象学的研究の動向を調査し、その意義や課題を展望することを目的とした。医学中央雑誌（医中誌）Webを用いて「現象学」をキーワードに過去5年間（2013年から2017年まで）に収録された学術論文の検索を行った。選定された95本の論文を対象に、学問別、対象別、方法別、目的別の4項目で調査を行った。この結果から、対人支援の現象学には以下4つの研究意義が存在すると考察された。1) 生死に直面する経験と克服の探究、2) 疾病や障害とともに生きる生活への焦点、3) 既存の支援観の問い直し、4) 対人支援上の新たなニーズへの挑戦。今後の課題としては、現象学的方法は研究者自身の主観にも批判的検討を要するため、研究上のスーパーバイズを受けられる環境を整備していくこと、また多岐にわたる現象学的方法を比較検討し、特徴別に体系化する方法論研究も有効と考えられた。

1. 緒言

本稿は対人支援領域における現象学的研究の動向を明らかにし、その結果から現象学的研究の特質や今後の展望について論じるものである。現象学は質的研究法の一つとして日本国内においても徐々に広まりつつあるが、研究法としての認知度や使用頻度は高くはない。もとは哲学であり、方法論としても様々な現象学的アプローチが示されているため、初学者にとっては難しく感じられ、手を出しにくい印象も背景にはあると考えられる。

そこで本稿では、過去5年間に国内で発表された現象学的研究論文を調査し、その内容や方法を整理し提示する。「私たちは知らないうちに現象学をしていた」¹⁾と看護の現象学者が述べたように、実は現象学は日々の対人支援で実践されている他者理解の原理であり、その仕組みは馴染み深いものなのである。人間の経験のありさまと本質を明らかにする現象学が、対人支援の領域ではどのような形を取っ

て実現されるのか—現象学的研究の実態解明からその意義の理解を深め、広めていくことが本稿のねらいである。

1.1 現象学の理念とその応用

現象学は20世紀初頭のドイツで Husserl によって創始された哲学であり、今日の対人支援領域では質的研究法の一つとして位置づけられる。この間、哲学のみならず、心理学や社会学、教育学、芸術等の人文科学に現象学の原理は広まり、日本でもあらゆる学問領域に応用現象学が見られるようになった。

試みに論文検索サイト CiNii で「現象学」をキーワードに検索してみると、2017年の1年間に掲載された論文数は123件であった（図1）。哲学が最多であるが、次に教育学、看護学、医学、芸術、社会福祉学、リハビリテーション学、言語学と続く。その他には体育学、国際協力、情報学、観光学等が含まれる。このように現象学は哲学として研究されるだけでなく、他の学問領域においても研究方法として

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 植田嘉好子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail : k_ueda@mw.kawasaki-m.ac.jp

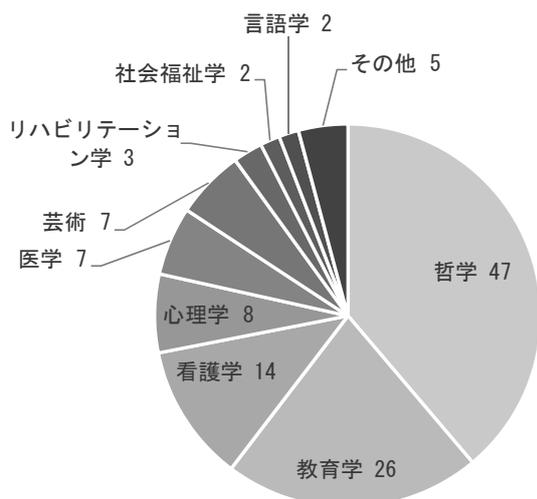


図1 「現象学」で検索された論文数(CiNii 2017年)

幅広く援用されていることが分かる。

例えば芸術では、「音楽美学」という音楽の本質論²⁾(人間にとって音楽の何が美しいと感じられるのかの追究)、「セザンヌの現代性」³⁾(セザンヌ自身が世界をどのように認識していたのかから絵画の現代性を解明)といった現象学的研究が見られる。また体育学では、「サッカー選手の〈パスの知〉の地平分析」⁴⁾や、「ダンスワークショップでの『表現』の考察」⁵⁾等、通常は意識されない身体感覚が人間にどのように現れているかを分析した研究もある。

これらの例が示すように、研究に現象学を用いるとは、物や出来事を人間にとっての経験の次元から考察するものである。現象学のスローガンである“事象そのものへ”⁶⁾とは、物事を客観的に因果論や法則性で捉えるという意味ではなく、その物事が人間一人ひとりにどのように現れているのかという、直接経験を捉えることを意図している。ただし、個別的な経験の解明のみが現象学の目的ではなく、そこから出発して、その経験の意味や構造を深い次元で明らかにすることによって、人間一般に当てはまる普遍性(本質)へと導くことに最終的なねらいがある。

しかし、これは哲学としての現象学の目的であって、対人支援領域の現象学的研究ではやや様相が異なる。心理学の領域に現象学を援用し研究方法として樹立した Giorgi⁷⁾は、現象学的方法によって「心理学の一般性」を浮き彫りにすると述べ、心理学における本質の解明が現象学的心理学の目的であるとした。また教育学者の van-Manen⁸⁾は「生きられた経験(lived experience)」を探究し、子どもたちの経験を子どもたち自身の立場や目線で捉え、教育者がどのように関わるべきかを「教育のタクト」として考察している。さらに看護学の Benner⁹⁾は、「解

釈的現象学が、看護科学・看護実践・健康と病気の生きられた経験および保健医療の倫理と方針とにおいて、提供すべきことは何なのかということを導き出す」と記している。

つまり哲学以外の学問における応用現象学では、それぞれの学問上の関心や使命に応じた本質を探究することが目的となる。このため対人支援領域の現象学的研究においては、「難病患者の生活世界」¹⁰⁾といった個別的経験の解明のレベルから、「ケアリングの徳」¹¹⁾といった一定の普遍性を取り出すレベルまで、様々なバリエーションをもつに至っている。

1.2 対人支援領域の現象学的研究を対象とする理由

本稿では、近年の国内における現象学的研究の動向を調査するにあたり、医学や看護学、心理学、福祉学等を含む、対人支援に関わる学問領域全体を射程とする。これには二つ理由がある。一つは、患者やクライアントがどのように自らの疾病や障害を経験しているのか、また彼らが治療や援助をどのように経験しているかについての理解は、職種に関係なくあらゆる対人支援専門職に求められるからである。チーム医療や多職種連携によって包括的な支援を目指すためには、関わるすべての専門職が、対象となる患者やクライアントの理解を共有しておく必要がある。患者本位・利用者主体の支援を実現するには、患者やクライアントの目線で彼らのおかれている状況を理解することが不可欠と考えられるからである。

二つ目の理由は、現象学的研究に関する国内外の学会が、すでに学問横断的に組織されている実態からである。Institution of International Qualitative Methodology は毎年 Qualitative Health Research Conference を開催し、現象学的研究には看護やソーシャルワーク、教育や保育の分野が参加している。また International Human Science Research Conference においては、哲学や心理学、教育学、芸術学等の人文科学における現象学的研究が報告され議論されている。国内においても、「日本質的心理学会」が心理という学問名が入りながらも、実態は心理学以外の領域も含めて質的研究の推進を図ってきた経緯がある。2015年には「臨床実践の現象学会」が新たに設立され、「臨床実践」の意味や構造を明らかにすべく、様々な学問領域の応用現象学が学際的に組織化されている。

1.3 質的研究法としての現象学

先述のように現象学は質的研究法の一つに位置づけられ、質的研究の一般の手引書ではグラウンデッド・セオリー・アプローチやエスノグラフィーと

並んで紹介される^{1,12,13)}。実際に現象学が対人支援領域の研究論文にどの程度採用されているかについては、いくつかの報告がある。例えば Shin¹⁴⁾は Journal of Qualitative Health Research (QHR) に1999年から2007年までに掲載された671本の研究論文を方法論別に集計した結果、単に「質的研究」と書かれた論文が135本、グラウンデッド・セオリー・アプローチが106本、現象学が67本、エスノグラフィが33本、ナラティブ・アプローチが23本(以下続く)と発表した。ヘルスケアに関する国際誌では、現象学的研究が3番目に多いことが明らかとなった。

一方、国内では、戈木ら¹⁵⁾の調査によれば、1990年から2010年までに医療系雑誌に掲載された質的研究による原著論文は2,241本あり、KJ法が最も多く618本、グラウンデッド・セオリー・アプローチが432本、内容分析390本、ナラティブ337本、ライフストーリー／ライフヒストリー223本、現象学75本、アクション・リサーチ58本、フィールドワーク51本、エスノグラフィ31本(以下続く)という結果を示した。現象学は6番目で質的研究全体の3.3%と、日本においては質的研究法としての採用はまだ少ないことが分かる。

また現象学的研究の内部にも様々な方法が存在している。先述の Shin¹⁴⁾は、国際誌 QHR に掲載された現象学的研究を、「現象学」、「解釈的現象学」、「解釈学的現象学」と3つの方法論に分類し、解釈学的現象学がその半数以上を占めることを示した。榊原¹⁶⁾は看護学における現象学的研究を精査し、①認識論的な現象学的アプローチ(患者の病気体験やその意味をその人が体験しているがまま、ありのままに理解し認識しようとするもの)と、②存在論的な現象学的アプローチ(患者やその家族、ケアに関わる看護師の在り方を理解するために、そもそも人間という存在者がどのような在り方をしているのかという現象学的存在論に知見を求めるもの)の二つの系統を示した。

さらには、記述的現象学と解釈的現象学とが対置され議論されることもある。Langdrige¹⁷⁾は、現象学が経験の理解に関わる以上、Husserl が求めたような「あるがままの記述」は哲学的にも正当で、方法論的にも健全だと述べる。つまり研究者は研究参加者のそばにとどまり、自身の声は最小限にとどめて参加者の経験に声を与えようとする立場である。他方の解釈派は、Heidegger が示したようにあらゆる記述は「解釈」であり、解釈する人間の解釈枠組みは無視できず、純粋な記述は不可能とする立場である。Langdrige は「(研究)参加者は自らの世

界を理解しようとする。研究者は、世界を理解しようとする参加者を理解しようとする」という Smith らの二重の解釈学を引用しつつ、「記述」対「解釈」を弁証法的に乗り越える現象学的方法「批判的ナラティブ分析」を独自に開発している。

1.4 本稿の目的

このように現象学的研究は質的研究法といえども様々な方法や系統があるため一様でなく、現象学的方法群とも呼べるほど幅広い。これは現象学が他の哲学(例えばアリストテレスの「万物の根源は水である」のようなテーゼ)とは異なり、本質を明らかにする方法原理¹⁸⁾であることから、他の学問にも広く応用され、時代や社会の要請に応じて様々な方法やアプローチへと展開されてきた結果ともいえる。だが展開後も、あらゆる学問の現象学的研究に通底する方法上の観点や理念はあると考えられる。特に対人支援領域では、各専門職がそれぞれの視点や技術で人間の「生(生命・生活・人生)」に関わりつつ、全人的なケアを目指しており、現象学がツールとして与える「経験の理解」は、その前提的基盤となる。本稿では、この現象学を用いた研究が、近年の対人支援領域でどのような主題や課題を追究しているのか、具体的にどのような人々を対象として、どのような方法で分析しているのかを調査する。それによって対人支援領域における現象学的研究の動向を明らかにし、そこから浮かび上がる現象学的研究の役割や今後の展望について考察する。

2. 方法

医学中央雑誌(医中誌) Web を用いて「現象学」をキーワードに過去5年間(2013年から2017年まで)に収録された学術論文の検索を行った。医中誌 Web は国内発行の医学・歯学・薬学・看護学およびその関連領域の雑誌論文を収録した医学文献データベースであり、医療や看護、ソーシャルワーク、リハビリテーション等の対人支援領域の現象学的研究が検索できる。また、心理学や教育学の論文の中でも、心理臨床や障害児教育等の対人支援に関する論文は、このデータベースが対象とする雑誌に掲載されていると考えられる。なお、2013年までの現象学的研究については、千田¹⁹⁾や松葉と西村²⁰⁾によって看護学を中心に詳細な動向が報告されているため、本稿ではそれ以降の論文を対象とした。

検索された論文のうち、原著論文並びに総説を対象とし、学問別(どの学問領域で現象学的研究が行われているか)、対象別(患者や家族、支援者等どのような対象で研究されているか)、方法別(どのような現象学的方法を採用しているか)、目的別(ど

のような目的で行われた現象学的研究か)の4項目で検討を行った。

3. 結果

対人支援領域の現象学的研究を上記の方法により検索した結果、98本の論文が収集された。そのうち、撤回論文1本並びに、経絡現象学に関する東洋医学系論文2本は本稿が主旨とする現象学とは異なるため除外し、残りの95本を分析対象とした。以下、それぞれの項目別に結果に言及する。

3.1 学問別分類

現象学的研究の学問別分類では看護学が66本、医学とリハビリテーション学が各々8本、心理学が6本、介護福祉学と教育学、社会福祉学が各々2本、スポーツ科学が1本であった(表1)。ここでいう看護学には助産学や保健学も含まれる。医学では統合失調症をはじめとする精神病理学が中心であった。リハビリテーション学には神経現象学や理学療法学、作業療法学が含まれる。教育学では特別支援教育や学習障害がテーマとされ、社会福祉学では障害学生支援や「発達障害」の概念が検討されている。

表1 現象学的研究の学問別分類

学問	論文数
看護学	66
医学	8
リハビリテーション学	8
心理学	6
介護福祉学	2
教育学	2
社会福祉学	2
スポーツ科学	1
計	95

3.2 対象別分類

現象学的研究の対象別分類を表2に示した。現象学を用いた論文のうち、約6割が支援や教育を受ける立場を対象とした研究であった。内訳は、患者やクライアント等の当事者が45本、家族が6本、学生が9本であった。当事者45本のうち40本は疾病や障害を有する者であり、残りの5本は病者ではない更年期女性²¹⁾やカルト脱会者²²⁾等を対象としていた。

次に、支援者を対象としたものが21本であった。ここには看護師や助産師、作業療法士、介護支援専門員、介護福祉士等が含まれる。支援者に生じている感情体験²³⁾や身体経験²⁴⁾、看護教育における認

表2 現象学的研究の対象別分類

研究対象	論文数
1. 支援・教育を受ける立場	60
(内訳) 当事者	(45)
学生	(9)
当事者の家族	(6)
2. 支援者	21
3. 複数対象	4
4. 治療・援助理論	4
5. 文献	4
6. その他	2
計	95

識^{25,26)}が対象とされていた。

また複数の立場を対象とした研究も4本見られた。患者とその家族を対象とした研究^{27,29)}では、患者のみならず家族も含めて支援の対象として考える方向性が読み取られる。また家族と医療スタッフを対象とした研究³⁰⁾では、患者本人を支える際に家族と医療スタッフがどのように連携すべきかが論点となっている。また、障害者雇用をテーマとした論文³¹⁾では、特別支援学校教諭と就職先の企業管理職を対象に、「支援の質」について比較検討している。

現象学的研究は、人を対象とした臨床実践だけではない。従来の治療・援助の理論やモデルを検討し、そこに見られる課題に対して現象学的なアプローチの可能性を示していく研究も4本見られた^{32,33)}。また文献を対象とした研究も4本あり、各学問領域の研究を整理し、現象学研究の意義を検討する総説のスタイルの論文^{34,35)}が見られた。その他の対象としては、歴史上の人物を取り上げた病跡学³⁶⁾、研究者自身の認識の変化から障害の概念を再考した研究³⁷⁾があった。

3.3 方法論別分類

対象95本の現象学的研究論文について、方法論を焦点に調査した。どのような研究方法を用いたかに関しては、論文によって様々な表現方法が認められた。そのため表3のように整理し、筆者が5つのカテゴリーに分類した。一つ目は「特定の研究者による質的研究法として開発された現象学的方法を採用」したカテゴリーである。特定の研究者による所定の手続きに沿って、データ収集や分析、結果の提示が行われている。この中では Giorgi の方法が最

多で14本, Bennerの方法が8本, Colaizziの方法が4本, 以下 Smith, Cohen, Thomasらと続く.

次に「——現象学」という方法で示された現象学的研究のカテゴリーである. 現象学のどの側面を強調するか—記述的 descriptive か, 解釈的 interpretive か, あるいは解釈学的 hermeneutic か—を表したものと考えられる. ただし, Bennerが interpretive と hermeneutic とを相互互換的に用いているため, 対象論文においても両者が厳密には区別されていないことも想定される. 本稿では, 論文中に記載された方法論に従って分類した.

三つ目は「——アプローチ」という表現のカテゴリーであり, 研究対象にどのようにアプローチ (接

近) するかを表した方法である. 内容的には二つ目のカテゴリーと合体させることも可能であるが, 特徴的なのは「実存的 - 現象学的アプローチ」の方法で, 「実存的」という語を現象学の前に付記し, どの角度から対象にアプローチするのかを明確にしている.

四つ目は「現象学的——」という表現のカテゴリーであり, 分析の視点や方法としての現象学の援用を示したものである. 特定の研究者による現象学的方法に依って立つのではなく, 現象学を一つの分析視点として捉えている所に特徴がある.

最後のカテゴリーは, 哲学としての現象学者の提唱した概念に依拠してデータを考察しているカテゴ

表3 現象学的研究の方法論別分類

方法論	論文数	方法論カテゴリー
Giorgiの方法	14	
Bennerの方法	8	
Colaizziの方法	4	
Smithの方法	2	特定の研究者が 質的研究法として 開発した 現象学的研究法を 採用
Cohenの方法	2	
Thomasの方法	1	
Van=Manenの方法	1	
西村の方法	2	
榊原の方法	1	
佐久川の方法	1	
現象学	22	「——現象学」
解釈学的現象学	6	現象学のどの側面を 強調するか descriptive, interpretive, or hermeneutic
解釈的現象学	4	
記述現象学	2	
現象学的アプローチ	6	「——アプローチ」
解釈学的現象学アプローチ	2	研究対象や主題に どのようにアプロ ーチ (接近) するか
実存的—現象学的アプローチ	2	
現象学的分析	5	「現象学的——」
現象学的視点	2	
現象学的研究方法	2	
現象学的社会学的視点	1	
フッサールの概念	2	
ハイデガーの概念	5	現象学者の提唱した 概念に依拠して考察
メルロ=ポンティの概念	2	
計	99 *	

*重複があるため総論文数95本より多くなっている

りである。ここでは、研究全体のデザインとして現象学的研究法を採用したというよりも、入手したデータの解釈や考察に現象学の概念を用いたところに力点がある。三つ目までのカテゴリーが、研究の準備から計画、データ収集、分析、結果の提示、考察に至る一連の手続きに現象学的姿勢を反映するのに対し、このカテゴリーでは主に考察の部分のみに現象学的な要素が見られるのが特徴と考えられる。

3.4 目的別分類

対象95本の論文のうち、対象別分類(表2)の「4. 治療・援助理論」及び「5. 文献」を除いた、人を対象とする論文89本について、現象学的研究の目的による分類を検討した。その結果、「a. 経験や体験の理解」、「b. 価値観・認識・心理過程の解明」、「c. 支援概念の現象学的考察」、「d. 現象学的症例研究・介入研究」の4タイプに分類された(表4)。

対人支援領域の現象学が最大の関心を持って取り組んできたのが「a. 経験・体験の理解」であり、論文数も89本中38本と半数近くを占める。このタイプは、対象者の経験や体験をありのままに本人の視点に沿って解き明かす研究である。「高齢がん患者が終末期を生きる様相」³⁸⁾、「統合失調症患者の『再発』という体験の意味」³⁹⁾、「介護施設入所者にとって食事の時間はどのように経験されているか」⁴⁰⁾、「不育症妊婦の妊娠初期における経験」⁴¹⁾等は、患者や利用者自身が病や障害を日々どのように経験しているのか、また介護や看護のケアをどのように経験しているのか、その生きられた世界に焦点を当てた研究である。

また支援する側の経験を明らかにする研究には「救急医療における患者の生死に関わる看護師の感情体験」⁴²⁾、「筋ジストロフィー病棟で働く看護師の経験」⁴³⁾、「在宅サービス従事者の終末期支援で経験する葛藤とその対処」⁴⁴⁾、「日本におけるインドネシア人看護師の生活体験」⁴⁵⁾等があり、支援者自身が現場で感情的に揺さぶられ葛藤に苛まれ、それらに

何とか対処しようと懸命にもがく経験も描かれる。また外国人看護師や病棟の異動といった文化の違いに着目した経験のありさまも探究される。他には「看護の判断に迷った臨地実習中の看護学生が指導をどのように経験したか」²⁶⁾、「生命の尊さ、人間の尊厳を学ぶカンファレンスにおける学生の体験」⁴⁶⁾等、実習教育における経験を学生の目線で捉え、学生が学ぶ生の姿を理解しようとする研究もある。

一方、この「a. 経験・体験の理解」のタイプには批判的視点に立つ研究もある。「どのように患者は医療者へ語らなくなっていくのか」⁴⁷⁾、「根治困難ながん患者の看護学生に受け持たれた体験の意味」⁴⁸⁾、「精神科訪問看護を否定的にとらえた利用者の体験」⁴⁹⁾では、特に支援実践がうまく行かない場面や支援を拒否された状況を取り上げ、支援を受ける側からその経験の意味を探究していく方向性を打ち出している。つまり、患者や利用者の経験をありのままに理解するとは、支援の成功体験や日々の何気ない日常を描写するだけでなく、むしろ支援から遠ざかっていく患者や利用者にも目を向け、そこで彼らに何が起こっているのかを丁寧に探究することによって、私たちの支援実践を批判的検討へと導くことに目的があると考えられた。

「b. 価値観や認識、心理過程の解明」のタイプは、「a. 経験・体験の理解」と比較して、対象者の経験や生きられた世界をありありと(vividに)描くだけでなく、その意味や構造を分析し、対象者の認識や心理過程としてより抽象度の高い研究結果を示すものである。具体的には「産前産後骨盤帯痛を有する女性の経験とその治療に対する認識」⁵⁰⁾、「壮年期に脳卒中を発症した生活者の健康に関する価値観」⁵¹⁾、「聴覚障害学生のノートテイク支援に対する認識」⁵²⁾といった患者や障害学生を対象とした研究がまず挙げられる。また家族を対象としたものでは「新生児死亡を経験した両親の心理過程」³⁰⁾、「入院児に付き添う母親の苦しみ」⁵³⁾等があり、苦しみや困難を経験する家族の時間的意味や関係における意味を明らかにする研究もある。さらには「がん看護に携わる看護師の現象の見方と看護ケアの変化」⁵⁴⁾、「初めての看護学実習における学生の臨床の見え方の変化」⁵⁵⁾等、看護師や看護学生の認識の変化を研究したものもある。

「c. 支援概念の現象学的考察」のタイプでは、支援における概念を現象学的に再構築するために、改めて患者や支援者の経験のありさまに立ち返ろうという意図が見受けられる。例えば「手術を受けた初発乳がん患者のレジリエンスを支える要因」⁵⁶⁾、「熟練助産師の分娩介助におけるReflectionの探究」⁵⁷⁾、

表4 現象学的研究の目的別分類

目的からみた研究のタイプ	論文数
a. 経験・体験の理解	38
b. 価値観・認識・心理過程の解明	14
c. 支援概念の現象学的考察	21
d. 現象学的症例研究・介入研究	14
計	87

「発話不能患者への作業療法における間身体的主客未分の経験」⁵⁸⁾の研究では、それぞれ「レジリエンス」や「リフレクション」、「間身体性」といった対人支援上の概念が、その経験に関する生の語りから現象学的に再検討されている。

「d. 現象学的症例研究・介入研究」のタイプは、医学やリハビリテーション学、心理学、看護学の領域が中心であった。医学では「統合失調症患者の視覚を対象とした記述現象学」⁵⁹⁾や「身体型対人恐怖をラカンにより現象学的に分析した研究」⁶⁰⁾、リハビリテーション学では「パーキンソン病患者の歩行訓練に時間認識を焦点とした現象学的介入を行った研究」⁶¹⁾、心理学では「ゲシュタルト療法に現象学的な観点を導入した研究」⁶²⁾等の研究があり、いずれも臨床に直接現象学の原理を採用した実践的研究と位置づけられる。

3.5 主題別分類

以上の項目別分類から、改めて対象の現象学的論文を見渡し、これらにおいて取り扱われる研究主題について検討した。ここでは、1) 生死に直面する経験とその克服の探究、2) 疾病や障害とともに生きる生活課題への焦点、3) 既存の支援観の問い直し、4) 対人支援上の新たなニーズへの挑戦、の4つの観点から論じていく。

3.5.1 生死に直面する経験とその克服の探究

対人支援において、生死の危機に直面し苦悩する経験は、患者や利用者ら「当事者」は言うまでもなく、彼らに関わる「家族」や「支援者」も避けて通ることのできない生の局面である。「当事者」を対象とした現象学的研究では、がん患者を対象とした研究が8本と最多であり、その半数が終末期や難治性のがんを扱ったものであった。例えば、高齢がん患者にとっては“老いのがんが覆いかぶさる”、“がんのつらさを凌ぎながら経過に身を委ねる”、“生き抜いた自信を希望に繋ぐ”等の意味が見出され³⁸⁾、隣がん患者の経験からは“診断時から予後不良や死という意味を医療従事者との相互作用を通して取り込み、いずれ再発、治療の手立てがなくなることを理解し受けとめるように期待され、彼らもそれに備えようと格闘していた”と、患者にとっての病気の受容には、医療者からの期待に応えようとする側面もあることが明らかにされた⁶³⁾。また、20代前半の在宅がん終末期療養者の体験では「死を待つだけ」の存在から“母や訪問看護師の気遣いを得て（中略）未来をめぐけた自己のあり方の可能性を取り戻す”、“死にゆく上での気がかりを分かち合い、生きること意識を向ける”、“現在を精一杯生きているから満足である”と、死にゆく世界での重要な他者

との本来的関わりが考察されている⁶⁴⁾。

この主題には、脳卒中患者や心疾患患者が突如病気に襲われた体験や、その後の病識の変化を丁寧に聞き取った研究もある^{65,66)}。さらには病名の告知や緩和医療の提案等、医療者から重大な情報を提供された時の患者や家族の経験を明らかにする研究⁶⁷⁾もあり、いずれも生命の危機や転換点を患者や家族がどのように捉え、対処し、乗り越えようとしたのかを理解する大きな手掛かりとなる。

また不育症妊婦の研究⁴¹⁾では、不育症女性が妊娠できたにもかかわらず、常に流産を想定して不安のループから抜け出せず自分を責めたり、診察は審判が下る瞬間と感じて極度に緊張したり、過去の流産週数を超えると安心したりと、まだ見ぬわが子の生死の可能性を、自身の身体変化を通じてリアルに経験していることを明らかにした。

命の最期を実際に看取った経験を取り上げた研究は2本挙げられる。一つは特別養護老人ホームで入居者を看取った家族の経験⁶⁸⁾であり、他方は先天性心疾患をもつ子どものターミナルケアした看護師の体験⁶⁹⁾である。両者は看取る対象が異なるものの、ターミナルという限られた条件の中で本人と家族との絆が深められるよう支援に配慮し、死後も支援者と家族とが亡くなった本人について語り合うことにより、看取りや死を前向きに捉えられる経験となりうるものが共通して示唆されている。

一方、「支援者」が患者の生命の危機をどのように捉え、対処し、乗り越えようとしたのかを明らかにする研究もある。クリティカルケア看護師は日々重症患者のケアにあたる中で、患者の壮絶な死に直面し、予測できない容態の急変に苛まれるが、徐々に患者の死に向き合う意味を見出せるようになり、急変時にも自身が看護師として能力を発揮できることを誇りに思うようになるという、正負の両義的な経験を明らかにした⁷⁰⁾。また先述の子どものターミナルケアを行った看護師は、いつ急変するか分からない状況に巻き込まれつつ、子どもの生命に関わる保護者の意思決定を見守り、子どもには積極的治療を続ける中でターミナルケアを行うという経験が示され、生死の不確かな状況における冷静さと家族に寄り添う態度が同時進行している様が窺われた⁶⁹⁾。

3.5.2 疾病や障害とともに生きる生活課題への焦点

対人支援においては、生死にかかわるクリティカルな場面だけでなく、日常の生活を支えることも重要な使命である。施設に入所する要介護高齢者にとっての食事は、単なる栄養摂取にとどまらず生活時間の基準となり、彼らの自立や正常性のサイン、

個人のアイデンティティの指標として経験されている⁴⁰⁾。更年期女性が閉経を迎える経験は老いの意味と切り離せないこと²¹⁾、また筋ジストロフィー患者がケアを単に受けるだけでなく、身体機能が低下していく中でも新しい自己を発見し、自らの世界を拡張していることが明らかにされている¹⁰⁾。

この生活課題に着目した研究で特徴的であるのは、壮年期の患者の生活に焦点を当てた2本の研究である。一つは壮年期に脳卒中を発症した生活者の価値観について、“障害を持って個人として理解してくれる人と共に‘社会’で生きる”、“仕事はあるのが普通で大事”、“人に迷惑をかけない”、“死と隣り合わせで生きる”、“麻痺があっても普通に動く”等の9つのテーマを抽出した⁵¹⁾。他方、退職を経験した男性若年性認知症の配偶者に焦点を当てた研究では、“何が起るのか分からない不安”、“できると思った行動ができない夫への困惑”、“社会の偏見を想像して抱く疎外感”、“夫に適した社会資源がないことによる苦悩”等の6つの思いを明らかにした⁷¹⁾。壮年期はまだ社会や家庭の担い手として期待される年齢段階であり、疾患による症状だけでなく、そこから派生する生活上の困難やそれを乗り越えようとする経験、それを支える家族の不安や苦悩を理解することによって、支援者は本人や家族の意に沿った支援の方針を見出し、社会に対しても理解を求めて働きかけることができると考えられる。

3.5.3 既存の支援観の問い直し

支援における既存の考え方や価値観を、現象学の方法によって問い直す研究も見られる。例えば統合失調症の「再発」は、治療からの脱落や支援の失敗と捉えられがちであるが、本人の体験としては「再発」によって自らの障害のイメージを形成しやすくなったり、古い価値観を打ち壊して新たな価値観を作り上げたり、良好な対人関係を構築する契機となっており、障害の受容を促進するという意味が見出だされている³⁹⁾。

また障害学生支援の研究では、障害学生は合理的配慮として授業サポートを受けることが当然の権利であると考えられがちであるが、重度の聴覚障害があってもサポートを拒否する学生の語りや、全ての科目でサポートが要る訳ではなく自分で必要性は判断するといった主張が示される。さらにはサポーターに障害者支援の経験を提供し役に立ちたいという彼らの願望から、サポートを受けるか否かを決定すること自体が彼らの権利であり、大学生活に求める意味を彼らの目線で理解することの必要性が示された⁵²⁾。

このように支援者にとって通常は疑われない事象や

支援の考え方は、時に患者や障害者にとっては学問的枠組みや制度・サービスの押し付けとなる場合もある。現象学的研究によって当事者の経験のありさまが彼らの視点から明らかになることで、患者や障害者が単に治療や支援を受ける側ではなく、それらを受けつつも独自の意味を生きる主体として捉え直すことが可能となる。この既存の支援観を問い直すという役割には、患者や障害者を社会におけるかけがえのない個人として復権することが目指されていると考えられる。

3.5.4 対人支援上の新たなニーズへの挑戦

これまでにはない新たな対人支援上の課題に挑戦する現象学的研究も見られる。例えば外国出身者の医療体験⁷²⁾や、インドネシア人看護師の生活体験⁴⁵⁾等、異文化をもつ患者や医療者が増加している時代的要請に応えようとする研究である。また医療観察法入院患者の社会復帰に向けた支援の研究⁷³⁾では、重大な他害行為を行った精神疾患患者の体験を本人の語りから解釈することを試みている。入院中にスタッフから気遣われる経験を幾度となく重ねることにより、患者は自身の他害行為時の苦しみを外在化し、被害者の気持ちにも関心を向けることができるようになった経緯が示されている。

近年、政策的にも推進される地域包括ケアを、最前線で担う多職種チームを対象として扱った研究⁴⁴⁾もある。在宅高齢者の終末期支援に関わる訪問看護、訪問介護、居宅介護支援従事者にグループインタビューを行い、彼らの経験する葛藤とその対処について現象学的に分析している。彼らの葛藤は、高齢者本人と家族との意向の相違や権力の差、主治医と家族との関係、自身の技量と終末期に要求される技量とのギャップ、死の捉え方等において経験されていた。一方で彼らは、看護、介護といった自身の専門ケアの質の向上を目指しつつ、多職種によるケアを統合した場合に高齢者本人がどうなるのかという全体像の発想でチームケアの質を考えていた。つまり在宅高齢者の身体や生活の支援を各々で分け持つという意識ではなく、高齢者ケアにともに関わるチームとして互いに同等の立場を取り、それによって葛藤を克服していたことを明らかにしている。

現象学的研究が上記のような新しい対人支援上のニーズに着眼し、これらに関わる人々の生身の経験の意味を明らかにすることは、彼らが現在置かれている状況の検証の一つとなり、現場に根ざした支援方法の開発に繋がるものと考えられる。

4. 考察—現象学的研究の展望と課題

上記の結果により明らかにされた対人支援領域の

現象学的研究の動向をふまえ、今後の現象学的研究の方向性を展望し、課題についても論じていく。

4.1 学問領域を超えて共有される研究主題

学問別分類では看護学が対象論文の大半を占めるという特徴があった。しかし研究主題としては必ずしも看護行為を対象とした研究だけではなく、むしろ生活者の視点で捉えられた患者と家族との関係性や社会的課題を扱ったものも認められた。これは科学的な測定や統計的処理によっては明らかとなくにくい個別的で文脈依存的な研究主題であり、患者や家族の側から彼らの関係性や生活がどのように見られているのかという現象学的視点が要請されたと考えられる。

またこのような関係性や生活への焦点は、看護学のみならず社会福祉学や介護福祉学にも共有されるものであり、これらの学問領域においても現象学的研究が増加していくことが期待される。現場での対人支援がすでに多職種チームによって実践されており、一人の患者や利用者をいかにその人の立場や視点で理解するかは、学問領域を超えて探究されるべき課題といえる。ただし、例えば社会福祉学においては、政策研究や施設マネジメント研究といった直接処遇以外の研究テーマも多数あり、ミクロからマクロまで研究の次元が幅広いために、人の認識を個別的に扱う現象学的研究の数が自ずと少なくなっているという背景も推測される。

4.2 研究対象の多様化と方法の課題

従来の現象学的研究では、患者やクライアントといった「当事者」を対象とした研究が中心であった¹⁹⁾が、今回の調査では「支援者」を対象とした研究も少なからず見られた。専門職の使命や理念といったあるべき姿からではなく、支援者が現場で感情を揺さぶられたり葛藤したりしているありのままの姿をまず認め丁寧に記述することで、専門職教育のあり方を再構築しようとするものである。これは患者だけでなく支援者も一人の人間として捉え、対人支援という人間対人間の関わりの意味を明らかにする試みと考えられる。ただし、支援者のありのままの経験を明らかにすることによって、支援者の立場の正当化や支援行為の美化となっていないか、分析や解釈には注意が必要と考えられる。

また当事者や支援者ではなく、研究者自身の経験を対象とした研究も見られる。村田³⁷⁾は研究者である自身の経験世界を掘り起こし、発達障害者との関わりによって自身の態度が変容したことを根拠に「発達障害」の概念を再検討している。これまでの対人支援の現象学では、患者や支援者等、研究者から見て「他者」の経験を対象としてきたが、研究者

自身の経験を研究者自身が分析する新たなスタイルを提示している。見方によれば、「一人称パースペクティブ」による古典的な現象学の方法ともいえるが、研究目的からみたサンプリングの整合性や、自身の経験を自身で分析する解釈の妥当性といった点で、慎重に検討されるべき課題もあると考えられる。

一方、「文献」を対象とした現象学的研究では、例えばストーマ増設患者のボディ・イメージに関する文献13本を選定し、そこに現象学的視点を加え、より高次の類型化を試みた研究⁷⁴⁾も見られた。現象学的研究は人の経験を直接対象とするものと考えられてきたが、今後は複数の文献をもとに本質を抽出する、メタレベルの現象学的研究も見られるようになることが予測される。

4.3 方法論としての修得上の課題

方法論別分類では、現象学的研究と称される方法が24種類見出された。このような方法論の多彩さが現象学的研究の理解しづらさに影響し、結果として現象学的研究の少なさに繋がっていることが推察される。現象学は本質を探究するための方法原理であるため、この原理さえ身に付ければ、(理論上は)誰にでも現象学的研究は可能である。しかし実際には「研究対象によってそのつど方法を考える」²⁰⁾と言われており、その通りにゼロから独りで方法を作り上げることは困難を極める。一方では Husserl の原典から現象学を身につけるといっても哲学科でない限り現実的でなく、いくつかの手引書を当たることが必要になるだろう。特に現象学的研究では研究者自身の主観も批判的に扱うため、研究上のスーパーバイズを受けられる環境が求められる。他の質的研究法と同様、独学では修得が困難な点も現象学的研究の課題と考えられる。

この課題の解決の一つとして、これまでに示されてきた種々の現象学的方法を比較検討し、特徴別に分類や体系化を試みる方法論研究も有効であろう。初学者や大学院生が自らの研究にどの現象学的方法を選択すべきかを判断したり、場合によっては複数の方法を折衷して新たな現象学的方法を創出したりすることに貢献できると考えられる。

4.4 現象学的研究の担い手の拡がり

最後に、対人支援領域における現象学的研究の担い手の拡がりについて述べる。これまでは主に、看護学や福祉学等の対人支援領域の研究者が現象学的研究を行ってきたが、最近では哲学者が対人支援のフィールドについて研究する例も見られる^{75,76)}。これらは医中誌 Web 上の論文ではなく著書として出版されたものであるが、現象学や心の哲学の専門家が、対人支援専門職とは全く異なる見地から対人支

援を論じており、新たな理解を展開している。

また当事者研究を現象学的研究の新たな実践として位置づける試みもある。石原⁷⁷⁾はヤスパースの精神病理学の限界と、精神障害者が健常者の世界から排除されてきた歴史をふまえ、過去の現象学的精神病理学研究は「患者自身の経験ではなく、健常者にとって『了解』可能なものに加工され、注釈をつけられた体験である」と批判した。自己とは異なるものをどのようにして「了解」するのかという根源的な問いに、「それぞれのパースペクティブの相対性を自覚しつつ、その経験を相互に交換し合うプロセ

スが必要」と述べ、当事者を研究主体に据えた上で、家族や支援者、地域住民ら当事者研究に関わる人々を「現象学的共同体」と表現した。

このように対人支援領域の現象学的研究は未だ数少ないながらも、学問領域を超えて、支援者－被支援者の関係を超えて、さらには研究者－一般市民の垣根を超えて、社会でともに生きるという観点で展開されようとしている。現象学が個人の主観から出発しつつも、目的は人間の生の普遍の本質の追求であることが、対人支援領域の研究でも体现されつつあるのではないだろうか。

文 献

- 1) グレック美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編著: よくわかる質的研究の進め方・まとめ方—看護研究のエキスパートを目指して—. 医歯薬出版, 東京, 2007.
- 2) 船木理悠: エルネスト・アンセルメの音楽美学における解釈と身体—現象学的身体論としてのアンセルメの音楽美学—. 音楽学, 63(1), 18-31, 2017.
- 3) 井上直子: セザンヌの現代性—メルロ＝ポンティの評論から—. 大阪教育大学紀要第I部門, 65(2), 1-21, 2017.
- 4) 寺田進志, 佐野淳: サッカー選手の〈パスの知〉の地平分析. 体育学研究, 62(1), 169-186, 2017.
- 5) 小泉朝未: ダンスワークショップで実現する表現の考察. メタフュシカ, 48, 89-102, 2017.
- 6) E・フッサール著, 長谷川宏訳: 現象学の理念. 作品社, 東京, 1997.
- 7) アメデオ・ジオルジ著, 吉田章宏訳: 心理学における現象学的アプローチ—理論・歴史・方法・実践—. 新曜社, 東京, 2013.
- 8) ヴァン・マーネン著, 岡崎美智子, 大池美也子, 中野和光訳: 教育のトーン. ゆみる出版, 東京, 2003.
- 9) バトリシア・ベナー編, 相良ローゼンマイヤーみはる監訳, 田中美恵子, 丹木博一訳: 解釈的現象学—健康と病気における身体性・ケアリング・倫理—. 医歯薬出版, 東京, 2006
- 10) 石田絵美子: 筋ジストロフィー病棟に暮らす患者たちの経験—青年期の患者たちとスタッフの「かかわり」の経験に注目して—. 保健医療社会学論集, 25(1), 30-40, 2014.
- 11) 小林道太郎: 病棟看護師の語りの現象学的分析から—「患者の希望に沿うこと」とケアリングの徳—. 大阪医科大学看護研究雑誌, 6, 36-46, 2016.
- 12) Lyn Richards, Janis M. Morse 著, 小林奈美監訳: はじめて学ぶ質的研究. 医歯薬出版, 東京, 2008.
- 13) 植田嘉好子: Part C のぞいてみよう質的研究—現象学の位置づけとその意味. 佐久川肇編著, 対人支援のための現象学入門—対人支援の「意味」をわかりたい人へ—, 第2版, 医学書院, 東京, 129-153, 2013.
- 14) Shin KR, Kim MY and Chung SE: Methods and strategies utilized in published qualitative research. *Qualitative Health Research*, 19(6), 850-858, 2009.
- 15) 戈木クレイグヒル滋子, 三戸由恵, 関美佐: 日本の医療分野における質的研究論文の検討(第1報)—論文数の推移と研究法の混同—. 看護研究, 45(5), 481-489, 2012.
- 16) 榎原哲也: 看護ケア理論における現象学的アプローチ—その概観と批判的コメント—. フッサール研究, 6, 97-109, 2008.
- 17) ダレン・ラングドリッジ著, 田中彰吾, 渡辺恒夫, 植田嘉好子訳: 現象学的心理学への招待—理論から具体的技法まで—. 新曜社, 東京, 2016.
- 18) 竹田青嗣: はじめての現象学. 海鳥社, 福岡, 1993.
- 19) 千田みゆき: 現象学的アプローチによる看護研究の動向—2000年から2008年まで—. 埼玉医科大学看護学科紀要, 3(1), 17-23, 2009.
- 20) 松葉祥一, 西村ユミ編: 現象学的看護研究—理論と分析の実際—. 医学書院, 東京, 2014.
- 21) 本田知佳子, 我部山キヨ子: 更年期を迎えた女性の月経に対する認識の変化. 日本助産学会誌, 30(1), 131-140, 2016.
- 22) 高杉葉子: カルト脱会者における勧誘前と脱会後の認知変化に関する質的検討—家族関係と自己の心理的課題およびコミュニティとの関係について—. コミュニティ心理学研究, 20(1), 62-80, 2016.
- 23) 渡辺幸枝: 認知症高齢者との関わりから引き起こされる看護師の感情に関する生きられた体験. 岩手看護学会誌,

- 8(1), 3-15, 2014.
- 24) 榎川綾子, 黒澤昌洋: 糖尿病足病変入院患者にフットケアを行う看護師の体験. 日本下肢救済・足病学会誌 5(3), 207-212, 2013.
- 25) 松井弘美: 指導を担う臨床助産師が学生に期待する分娩介助10例における学び. 母性衛生, 56(4), 658-666, 2016.
- 26) 正村啓子: 「その人に最善のケア」を創造するために基本的なこと—看護の判断に迷った臨地実習中の看護学生への指導の一経験を質的に分析する—. 山口医学, 65(1), 39-50, 2016.
- 27) 奥川沙希, 井上智子: 言動の混乱が見られた心血管術後患者と家族の体験および家族看護支援の検討. お茶の水看護学雑誌, 9(1), 51-63, 2014.
- 28) 沖野めぐみ, 桑名渚, 吉井香奈恵, 南光恵, 大矢根砂英子, 渡邊泰代: 長期入院中の重症心身障害児(者)を養育する家族の抱く思い—家族の体験談を通しての現象学的分析—. 国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター医学雑誌, 4(1), 55-59, 2017.
- 29) 伊藤良子: 障がいを持つ子どもと共に歩む母親の苦しみの意味と構造—フッサールの現象学的アプローチ—. 京都看護, 1, 31-45, 2015.
- 30) 和多田抄子, 立岡弓子, 中西佳衣, 長谷知美, 中野育子: 新生児死亡を経験した両親の心理過程. 滋賀母性衛生学会誌, 15(1), 27-33, 2015.
- 31) 石山貴章, 田中誠, 矢野川祥典: 特別支援学校進路指導教員と企業管理職との障害者雇用における「支援の質」に関する比較検討—Personal Attitude Construct (PAC: 個人別態度構造) による分析から見えてきたもの—. 職業リハビリテーション, 30(1), 9-16, 2016.
- 32) 大前晋: Tellenbach のメランコリー論再説—その構築過程と理論的意義—. 精神神経学雑誌, 115(7), 711-728 2013.
- 33) 景山洋平, 土澤健一: 作業療法と現象学の協働可能性—生活の均衡のあり方に焦点を当てて—. 均衡生活学, 9(1), 1-12, 2013.
- 34) 中村誠文, 岡田明日香, 藤田千鶴子: 心理臨床学的研究への現象学的アプローチの貢献の可能性—個別性と普遍性に着目して—. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要, 10, 91-100, 2015.
- 35) 津田均: 近年の統合失調症の精神病理学研究—英語圏の現象学的研究の論争と将来の方向性—. 臨床精神病理, 37(3), 229-244, 2016.
- 36) 二木文明: 倉田百三と車谷長吉の錯視体験について. 日本病跡学雑誌, 91, 72-82, 2016.
- 37) 村田観弥: 関係に着目した「発達障害」概念の様相. 質的心理学研究, 15, 84-103, 2016.
- 38) 栗田敦子, 川上千春, 遠藤貴子, 本田彰子: 高齢がん患者が終末期を生きる様相—療養生活における思いと支え—. お茶の水看護学雑誌, 9(1), 64-74, 2014.
- 39) 小林信: 統合失調症患者の障害受容の過程における「再発」という体験の意味についての考察. 群馬パース大学紀要, 16, 11-20, 2013.
- 40) Palacios-Cena D, Losa-Iglesias ME, Cachon-Perez JM, Gomez-Perez D, Gomez-Calero C and Fernandez-de-las-Penas C: Is the mealtime experience in nursing homes understood?: A qualitative study. *Geriatrics & Gerontology International*, 13(2), 482-489, 2013.
- 41) Futakawa K: First trimester experiences of pregnant women that have suffered recurrent pregnancy loss: A qualitative study. *Journal of the Tsuruma Health Science Society*, 40(2), 1-9, 2016.
- 42) 渡邊多恵, 上野和美, 片岡健: 救急医療における患者の生死に関わる看護師の感情体験. 日本職業・災害医学会誌, 62(1), 17-22, 2014.
- 43) 石田絵美子: 筋ジストロフィー病棟で働く看護師の経験—患者の入院生活を成り立たせている看護師の関わりに注目して—. 保健医療社会学論集, 27(1), 94-104, 2016.
- 44) 松井妙子, 鳥海直海, 西川勝: 訪問看護, 訪問介護, 居宅介護支援事業所従事者が, 在宅高齢者終末期支援を行う上で経験する葛藤とその対処—チーム活動に関するグループインタビューの現象学的分析から—. 香川大学看護学雑誌, 17(1), 11-24, 2013.
- 45) Efendi F, Chen CM, Nursalam N, Indarwati R and Ulfiana E: Lived experience of Indonesian nurses in Japan: A phenomenological study. *Japan Journal of Nursing Science*, 13(2), 284-293, 2016.
- 46) 泉澤真紀: 生命の尊さ, 人間の尊厳を学ぶ母性看護学実習学生カンファレンス—エンカウンター・グループにおける学生の体験—. 子どもと女性の虐待看護学研究, 1(1), 14-21, 2014.
- 47) 和久紀子: 婦人科がん手術体験者の排尿障害に関する研究—どのように患者は医療者へ語らなくなっていくのか—.

- 日本赤十字看護学会誌, 17(1), 27-34, 2017.
- 48) 高橋幸恵, 香春知永: 根治困難ながんを抱えた患者の看護学生に受け持たれた体験の意味. 日本看護学会論文集, 看護教育, 44, 153-156, 2014.
 - 49) 藤代知美: 精神科訪問看護を否定的にとらえた統合失調症をもつ利用者の訪問看護の体験. 日本精神保健看護学会誌, 24(1), 33-42, 2015.
 - 50) 坂本飛鳥: 日本における産前産後骨盤帯痛を有する女性の経験とその治療に対する認識について. リハビリテーション科学ジャーナル, 12, 13-25, 2017.
 - 51) 古川由紀, 谷本真理子, 正木治恵: 壮年期に脳卒中を発症した生活者の健康に関する価値観—解釈的現象学を用いて記述する試み—. 文化看護学会誌, 7(1), 13-21, 2015.
 - 52) Ueda K, Takeuchi Y and Yamamoto R: A Phenomenological study on the perception of hearing-impaired students towards note-taking support: In an effort to comprehend their meaning for college life. *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, 21(1), 1-11, 2015.
 - 53) 今西誠子: 入院児に付き添う母親の苦しみ. 京都市立看護短期大学紀要, 37, 13-23, 2013.
 - 54) 宮原知子: がん看護に携わる看護師の現象の見方と看護ケアの変化—ニューマン健康の理論と看護実践を統合させた学習会をとおして—. 北里看護学誌, 18(1), 41-49, 2016.
 - 55) 菊池麻由美, 羽入千悦子, 佐竹澄子, 青木紀子: 初めての看護学実習における学生の臨床の見え方の変化. 日本看護学教育学会誌, 26(1), 1-13, 2016.
 - 56) 高取朋美, 秋元典子: 手術を受けた初発乳がん患者のresilience(レジリエンス)を支える要因. 日本看護研究学会雑誌, 36(4), 65-74, 2013.
 - 57) 紙尾千晶, 島田啓子: 熟練助産師の分娩助助における Reflection の探究. 日本助産学会誌, 30(1), 17-28, 2016.
 - 58) 佐藤泰子: 発話不能患者への作業療法における現象学的アプローチ—間身体的主客未分の経験から作業療法士の患者理解を捉える—. ヒューマン・ケア研究, 16(2), 69-82, 2016.
 - 59) 山田幸彦: 統合失調症発症以前の視知覚変容の記述現象学的研究. 精神神経学雑誌, 115(8), 813-830, 2013.
 - 60) 松本卓也: 身体型対人恐怖の構造—存在の確信をめぐるラカンのパラドクス—. 臨床精神病理, 34(2), 185-198, 2013.
 - 61) 村部義哉, 加藤祐一, 大島埴生, 本田慎一郎: 加速歩行の改善を認めたパーキンソン病患者の1症例—時間認識における現象学的介入—. 認知神経リハビリテーション, 15, 87-92, 2016.
 - 62) 中尾文彦: ゲシュタルト療法における逆転移の活用について. ゲシュタルト療法研究, 6, 35-44, 2016.
 - 63) 吉田みつ子: 難治性のがんを生き抜く一瞬がん患者の語り—. 日本がん看護学会誌, 28(2), 15-22, 2014.
 - 64) 松村ちづか, 伊藤和弘: 在宅がん終末期療養者の病いの体験—重要他者との関わりを通じて自己の在り方の可能性にめがけて生きていくこと—. 聖路加看護学会誌, 16(3), 47-53, 2013.
 - 65) 北尾良太, 鈴木純恵, 土井香, 清水安子: 回復期リハビリテーション脳卒中者が語る病いの経験に関する研究—医療者とのかかわりから"あとから病いがわかっていく"こと—. 日本看護研究学会雑誌, 36(1), 123-133, 2013.
 - 66) 河村敦子, 稲垣順子: 壮年期から中年期の就労者における初回急性心筋梗塞の体験に関する現象学的研究. 山口医学, 64(2), 69-78, 2015.
 - 67) 内山久美, 久木原博子: 筋萎縮性側索硬化症の病名告知の現状と患者の心理状態. キャリアと看護研究, 3(1), 3-14, 2013.
 - 68) 那須佳津美, 深堀浩樹: 特別養護老人ホームで入居者を看取った家族介護者の経験. 老年看護学, 19(1), 34-42, 2014.
 - 69) 林原健治: 先天性心疾患をもつ子どものターミナルケアにおける看護師の体験—出生後よりICUにおいて継続して関わった看護師"A"に関する現象学的研究—. 日本看護科学会誌, 33(1), 25-33, 2013.
 - 70) 辻本真由美, 井上智子: クリティカルケア看護師の感情を揺さぶられる印象的な体験 (Impressive clinical experience) とキャリア形成への影響の検討. お茶の水看護学雑誌, 9(2), 1-13, 2015.
 - 71) 市森明恵, 市川あみ, 上嶋智, 久保山紗希, 黒川美沙子, 小西美希, 中島敦美, 西村匠, 岡本理恵, 表志津子: 退職を経験した男性若年性認知症患者の配偶者の思い. 日本認知症ケア学会誌, 14(4), 868-876, 2016.
 - 72) 百々雅子: 医療機関における外国出身者の受け容れの課題—山梨県における中国出身者をめぐって—. 山梨県立大学看護学部紀要, 15, 1-9, 2013.
 - 73) 牧野英之: ある医療観察法入院患者の体験の語りとその解釈—A氏の対象行為前のストレスと入院後の対処—. 日本看護学会論文集, 精神看護, 43, 50-53, 2013.
 - 74) 政岡敦子, 大森美津子, 西村美穂: ストーマを造設した患者のボディ・イメージに関する文献検討. 香川大学看護

- 学雑誌, 19(1), 45-52, 2015.
- 75) 村上靖彦：仙人と妄想デートする—看護の現象学と自由の哲学—. 人文書院, 京都, 2016.
- 76) 河野哲也：現象学的身体論と特別支援教育. 北大路書房, 京都, 2015.
- 77) 石原孝二：精神病理学から当事者研究へ—現象学的実践としての当事者研究と〈現象学的共同体〉—. *UTCP Uehiro Booklet*, 2, 115-137, 2013.

(平成30年7月27日受理)

Recent Trends and Outlook of Healthcare Research
Using Phenomenology in Japan:
Searching in the Database of Japan Medical Abstracts Society
within the Past 5 Years

Kayoko UEDA

(Accepted Jul. 27, 2018)

Key words : phenomenology, healthcare research, qualitative method, trend and outlook

Abstract

Phenomenology is one of the qualitative research methods used in healthcare studies. This method has gradually become known among Japanese researchers, however, there are still few phenomenological studies. The phenomenological approach has many variations based on the idea of philosophy, which might seem complicated to use as a research method. The aim of this review article is to clarify the trend of recent phenomenological research in healthcare, and to highlight the essential features of healthcare studies using phenomenology. Searching the Database of Japan Medical Abstracts Society, within the past 5 years (2013-2017), 95 studies using phenomenology were found. They were categorized by four items; academic fields, subjects, methodological aspects, and aims of research. The results revealed four recurring themes in phenomenological studies; 1) exploring how to overcome serious life crises, 2) focusing on needs and meanings in daily life, 3) examining of the existing values in healthcare, 4) challenging present-day issues in interpersonal support. Phenomenological research enables us to understand the meaning of people's existential experiences. Integrated community care services would require that all professionals should understand the user's life world to provide him/her with genuine support. Additionally, methodological research to systematize phenomenological methods according to its characteristics would be effective to resolve the complicated situation on phenomenological healthcare research.

Correspondence to : KAYOKO UEDA

Department of Social Work
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : k_ueda@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.28, No.1, 2018 1 – 14)